

全国連会報

第64号
平成22年2月1日 発行
全国高等学校
国語教育研究連合会
〒113-0034
東京都文京区湯島
1-4-25 斯文会館内

研修、研究の充実を

全国高等学校国語教育研究連合会会長

東京都立田柄高等学校長 村越 和弘

昨年の五月二十七日に行われた「平成二十一年度全国高等学校国語教育研究連合会 第一回全国代表者会議」におきまして、前会長北沢好一先生の跡を受け、全国連会長を仰せつかりました村越和弘と申します。北沢先生におかれましては、三年間会長としてご尽力いただいたことに敬意を表するとともに、感謝申し上げます。また、北沢先生には全国連顧問として、今後とも指導いただきたいと思います。微力ながら、全国の先生方のご理解ご協力を得て、高等学校国語教育の発展に努めてまいりたいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

さて、平成二十一年十一月に開催された全国連第四十二回大会神奈川大会に、全国から大勢の先生方にご参加いただき、ありがとうございました。また、文部科学省、神奈川県教育委員会、横浜市、川崎市、横須賀市の各教育委員会、神奈川県立高等学校校長会、私立中学高等学校協会にはご後援をいただき、感謝申し上げます。文部科学省教科調査官の西辻正副先生には、新学習指導要領の解説、特に「古典の指導の改善」にスポットをあててお話しいただき、理

解を深めることができました。大会主題は「生きてはたらくことばの力」でした。その趣旨は持田雄史大会実行委員長

の挨拶の中にある、「学校生活の中で言語活動にとどまらず、社会生活の中で『ことばの力』にも気づかせ、言語生活を豊かにし、未来を生きていくための言語活動」ということばに、そしてシンポジウムのテーマ「一人ひとりの未来につながることを求めて」に示されています。子どもたちを取り巻く環境が大きく変わりました。現代の情報化国際社会において、「生きる力」を育み支えるのはことばであることは誰しもが認めることでもあります。神奈川大会はあらためてそれを確認した大会であったと思います。そして、二十二年度第四十三回北海道研究大会の大会主題は、「生き抜くためのことばを求めて」個から地域へ、世界へつながる国語教育」という大きなテーマとなっております。神奈川大会の大会主題が受け継がれての主題となっております。さらに北海道ならではの企画も用意されています。大勢の全国の先生方にご参加いただき、北海道大会を通して、新しい時代の国語教育について考えていきたいと思っております。

ところで、神奈川大会の研究発表・研究発表表に見られたように、近年様々なタイプの学校が生まれ、「高等学校」という枠組みだけでは語れなくなりました。地域あるいは学校ごとに課題が異なり、昔ながらのチョーク一本で学校を渡り歩くという時代はすでに去りました。多様化した生徒の実情に対応するには、教科以外の取り組みもせざるを得ない状況になっていきます。ともすれば日常の教育活

動の忙しさに埋没しかねません。しかし、そのような状況の中で、教科の研究をおろそかにする訳にはいきません。そのような状況だからこそ、無理に時間を割いてでも、国語の授業力をつけていかななくてはなりません。

東京教育委員会では、二十二年度から東京都高等学校国語教育研究会をはじめとする任意の研究団体に、研究費として予算をつけることが検討されています。世代交代の時代を迎え、各研究団体のこれまでの地道な活動が、教員の資質向上にいかにも有用であったか、今後いかに必要であるかが認められたということでもあります。初任者研修や十年度次研修といった悉皆研修だけでなく、教員のニーズに応えた内発的な研修があつてこそ教員の授業力は高まっていくものではないかと思えます。都国研では、毎月教材研究の会や研究授業を行っています。若手からベテラン、そしてOBの先生が集まり、忌憚のない意見交換が行われています。二十二年度からは、そこに指導主事も参加することになるでしょう。

また昨年、岐阜県の高校の先生から問い合わせの電話をいただきました。平成二十一年に全国連事務局がまとめた「高等学校国語教育 研究発表・研究公開授業一覧」(合冊本)をご覧になり、集録されている東京の先生の発表資料(三十一回東京大会)を、ご自身の研究の参考にしたので、手に入れたとのことでした。早速連絡を取り、先生をご紹介することができました。全国連の活動が時を経て、活かされることになりました。

全国連会則にあるように、会の目的の一つは、「研究活動の情報交換、相互援助」にあります。全国の先生方がネットワークを結び、情報が共有化されて国語教育に活かされていくことは、全国連の目指すところでもあります。その基盤となるのは、諸先生方の日々の教育実践に他なりません。各都道府県におかれましては、国語部会の活動の一層の充実をお願いしたいと思います。全国連としましては、全国大会等の活動を通して研究成果の共有化を実現してまいりたいと思っております。

全国高等学校国語教育研究連合会 第42回研究大会 神奈川大会

大会報告

平成二十一年十一月五日・六日 於 横浜

大会実行委員長 持田 雄史（神奈川県立氷取沢高等学校副校長）

昨年の十一月五日、六日に横浜市で開催いたしました神奈川大会に全国各地から多数の先生方にご参加いただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、大会開催に際し、村越全国連会長をはじめ、各方面よりご支援とご協力を賜り、誠にありがとうございました。

少ない準備期間ではありましたが、過去二回の経験を活かし、神奈川県高等学校教科研究会国語部会の日ごろの活動を結果させて、皆様に満足いただけるような企画を考えていきました。

まず、大会テーマ

「生きてはたらくことばの力」は十七年前に開催された前回の神奈川大会の後、私たち国語部会の研究テーマとして掲げてきたものでした。

そこで、「生きてはたらくことばの力を育む国語教室の創造」を目ざして行ってき

た授業改善に向けての様々な取り組みの成果を全国の国語科

の先生方にご覧いただき、この思いを是非共有していただきたいと考え、本大会テーマといたしました。

この思いが最も強く現れていたのが二日目の分科会で、公立、私立の様々なタイプの高校そして中学校も交えての研究授業と研究協議を10会場用意いたしました。それぞれの教室で生き生きと活動する生徒たちの姿をご覧いただけたのではないかと、また、研究協議でも有意義な意見交換ができたと確信しております。さらに県立鎌倉高校では授業実践報告を行い、日ごろの授業研究への取り組みを紹介することができました。

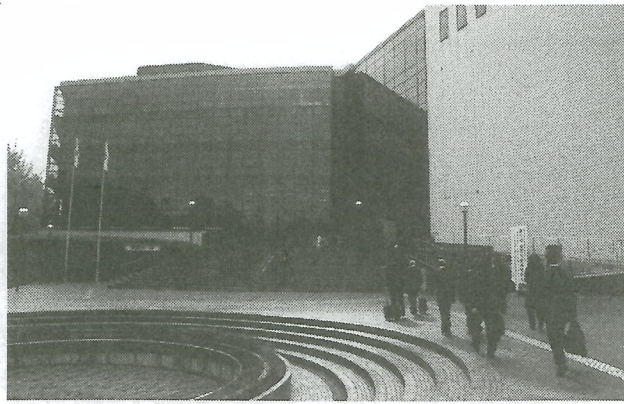
大会初日の記念講演の講師を北村薫氏にお願いできたのは役員一同望外の喜びでした。『北村薫の創作表現講義 あなたを讀む、わたしを書く』を讀み、私たちを二人にする作家であると考え、講師をお願いいたしました。詳しくは講演記録に任せますが、国語科高校教師としての側面を垣間見ることができたのは嬉しく、またそれが明日からの授業の活力になったと思っております。

シンポジウムでは大会テーマをさらに深化させ、「一人ひとりの未来につながることを求めて」をテーマに様々な分野から四人の方々に登壇いただきまして、討論を行いました。とても刺激的な熱のこもったシンポジウムとなり、生徒に対するアプローチなど考えさせられるものがありました。

新たに高等学校学習指導要領が告示されたことをうけ、文部科学省から西辻正副氏をお招きし、国語科の学習指導要領の理念から一歩踏み込んで、「言語活動の充実と古典の指導の改善」という具体

神奈川大会の概要

- 1、主催 全国高等学校国語教育研究連合会
神奈川県高等学校教科研究会国語部会
- 2、後援 文部科学省
神奈川県教育委員会
横浜・川崎・横須賀市教育委員会
神奈川県私立中学高等学校協会
神奈川県立高等学校長会
- 3、日時 平成二十一年十一月五日（木）・六日（金）
- 4、会場 第一日 神奈川県民ホール大ホール
第二日 県立横浜翠風高校・県立柏陽高校・県立光陵高校・県立横浜緑園総合高校・県立横浜栄高校・県立鎌倉高校・市立横浜商業高校・市立横浜サイエンスフロンティア高校
・横浜雙葉中学高等学校・横浜富士見丘学園中学高等学校
- 5、テーマ 「生きてはたらくことばの力」
- 6、第一日（全体会）
総会
文部科学省講話 文部科学省教科調査官 西辻正副氏
記念講演 「読むこと 書くこと」 作家 北村 薫氏
シンポジウム
「一人ひとりの未来につながることを求めて」
コーディネーター 横浜国立大学教授 高木展郎氏
パネリスト 弁護士 神谷信行氏
たしろ薬品社長 田代正樹氏
俳人 山西雅子氏
- 7、第二日（分科会）
*分科会の内容は5ページ
文学研修 ①横浜山手コース ②北鎌倉・扇力谷コース





新しい学習指導要領の国語に関する全般の話につきましては、お手元に配られている全国連会報(第六十三号 平成二十一年三月三十一日発行)にも書きました。そこをお読みいただければ大まかなところはご理解いただけると思いますので、本日は、新しい学習指導要領の理解を深めていただくために、特に「言語活動の充実」と「古典の指導の改善」ということにお話をしたいと思います。

神奈川の先生のお話のなかにもありましたが、キーワードとしては「授業改善」ということです。「生きる力」の理念は継承するというところで、現行学習指導要領の趣旨である、生徒に

的なテーマでの講話をいただきました。これからの教育課程編成だけでなく日常での授業への取り組みに大いに参考になるものでした。最後の文学研修もよい天気と思われ、横浜、鎌倉で実施できました。参加された先生方からの喜びの声に役員は労いを感じました。改めて参加いただいた先生方には感謝申し上げます。さてこの後、今大会の概要を報告いたしますが、詳しくは「大会集録」をご覧ください。

新学習指導要領の理解を深める

「言語活動の充実」と「古典の指導の改善」

文部科学省初等中等教育局教科調査官

西辻 正副 氏

「生きる力」を育成するということは新しい学習指導要領も同じです。趣旨が変わらないのと同じく学習指導要領を変えるのか、このところを一言というなら、生徒に「生きる力」を身につけさせるための手立てにいくつかの問題があったのではないかと、中央教育審議会の審議のひとつの共通理解、共有したところです。その手立ての一つとして授業の改善が欠かせないのではないかと、そういう視点できょうの話聞いていただくとありがたいと思います。

最初に、新しい学習指導要領にいたるまでの動きを少し整理しておきたいと思えます。「生きる力」を育成するという理念は変わらないうえ、やはり社会が変化してきています。この社会を今回の中央教育審議会の答申では「知識基盤社会」という言葉で認識を示しました。さらに、さまざまな調査の結果、我が国の子どもたちにはやはり課題がみられます。先生方の尽力で、子どもたちの基礎的な知識・技能については相当程度身に付いているという結果なのですが、一方で「生きる力」に直接関わっていくような、思考力、判断力、表現力、課題があるということです。さらに学力の面だけでなく、自信への自信の欠如、自らの将来への不安、体力の低下など、心とからだに關わる課題もみられました。

今回の改訂には二つ大きな点があると思えます。平成十七年の二月に文部科学大臣から審議をするようにという要請が出され、非常に長い審議を経て結論が導き出されました。そしてその審議がはじまってから、教育基本法の改正、さらにそれをふまえての学校教育法の改正が行われました。そのように非常に長い審議を経たものであるということ、それと、新たな教育基本法のもとの改訂になっ

たということ、この二つが大きなのではないかと思えます。

二年十月月にわたる審議がなされて答申が出るまでの間、審議のまとめとか審議経過報告というような形でも公表をしましたが、今回、時代が変わったということで一番大きかったのは、審議の状況がほぼリアルタイムでホームページにアップされていたということです。これは十年前には想像できませんでした。そういう環境のなかで、さまざまな情報が早く伝わっていくということが、いまの特色かなと思っております。

答申のなかでは改訂の大きな方向性として七点が示されました。これについては先生方も説明会等で強調されたという感じをお持ちかと思えます。これは小中高等学校共通のもので、高等学校ではこれ以外のキーワードとして「共通性と多様性」という点からの見直しも行われたということです。国語に関していえば共通性という点からは「国語総合」が共通必修科目になったということがあつたと思えます。多様性というところから言えば、いままで一科目だった現代文の選択科目が、二科目になった。現代文も古典も二科目のなかから選べるようになった。こういうところも一つの多様性といえるかと思えます。

こういう長い審議を経て、さらに新しい教育基本法、それにもとづいて改正された学校教育法等をふまえて新しい学習指導要領が示されたということでもあります。〈略〉

冒頭部分のみ紹介いたしました。詳しくは大会集録をご覧ください。

記念講演「読むこと 書くこと」

作家 北村 薫 氏

記念講演は第一四一回直木賞を受賞された北村薫先生をお招きし、聞き手二名が先生に様々な質問を投げかける形の対談形式で行われました。ここでは、表題の「読むこと 書くこと」に関して、先生



にお話しいただいた部分を
抜粋して紹介いたします。

(聞き手) 「読んで、書
くこと、それから「生き
てはたらく言葉」というこ
とでいいますと、伝わる
言葉、伝わりない言葉につ
いて、創作者として何か意
識されたりすることはある
のでしょうか。」

作家というのは自分が書くことに関しては、これだと思ったこと
は、たとえは分かりやすい書くことに関してでもそうです。別な言
葉を使ってみたい何とかがこのことは、やはりできないのです。こ
れだ、これしかないと思う言葉を使うしか、ないのです。あとは
それが果たして時の流れの中でどうなるか、あるいはその読者がど
う読んでくれるかは、向こうに任せることです。(略)分か
る、分からないは残酷で、(読者が)分からないことは確かである
のです。ただ、そのどちらかはやはり譲れないのです。

偉そうなことを言っているけれども、こちらには全部分かるのか
とどうも、私にしても分からないことはいっぱいあります。(略)モー
ツァルトのことを主題にした、サリエリの出てくる戯曲があります。
その中で、サリエリがモーツァルトは天才だと気が付く場面、モー
ツァルトのグラン・パルティータという曲が流れるのですよ。サリ
エリというのは、当時の有名な音楽家です。(略)モーツァルトの
本を読んでいたら、そのグラン・パルティータの解説で、作者のシエ
ラーはその場面でグラン・パルティータのこの部分を使ったが、
これしかないと言っているのです。これはまさに天才の曲なので、
これを聴いたとき、サリエリが打ちのめられるのは分かる。

ところが、私はグラン・パルティータを聴いても分からないです。
これが天才。分からない。分かるというのは、そういうことです。
そこにはものすごい壁があって、私にも分からないことはいっぱい
あるわけです。それでは、グラン・パルティータが神の作品だと分
からなければ、その戯曲が分からないかといえば、そんなことはない
のです。私などは逆に、サリエリが「ああ」と思うから、ああ
これはすごいのだと、分からないけれども、そこは通じるわけです。

一方、(略)そのころの新聞の評などには、この『アマテラス』
という作品は要するに「サリエリという凡才とモーツァルトという
天才の」と書いてある。そんなことは全然ありません。サリエリと
いうのは、当時もてはやされ、頂点を極めていた音楽家ですから、
大秀才です。(略)ところが一人の小僧によって超秀才が打ちのめ
されている、つまり超秀才と天才の物語なのです。でも、おもしろ
いこと、それは超秀才でなければ理解できない物語かといえば、
そうではない。なぜかといえば、そのサリエリの苦しみは人間の苦
しみだからです。(略)おれはこんなに小説が好きだ、自分で一生
懸命書いている、こんなに書いていっているのに、どこへ投稿しても、ど
こにも通らない。こんなに一生懸命やっているのに、なぜなのかと
いう悲しみは、みんなに共通するものです。それはわれわれ凡才が
天才に対して持つ悲しみですが、天才にとっても、そういうことは
起るわけです。天才がまた別のものに対して、そういう思いを抱
くわけです。人類にとって共通のものであるから、分からない一点
があっても、分かることはできるわけです。すべてが分かる必要は
ないけれども、だれにも分からない点があり、分かる点もあろう
というところが、読んでいくことのおもしろさです。

そういう意味では、いい読み、深い読みというのを、だれかに教
えてもらうことは非常に参考になったりします。読むというのは、
そういういろいろな要件を踏まえつつ作品に向かい合っていくこと
で、非常に大きな創作だと思います。(抜粋)

対談の内容は作品のモチーフの話から教育論など、バリエーティ豊
かに広がってゆきました。詳しくは集録に掲載します。お読みいた
だければ幸いに存じます。

シンポジウム

「一人ひとりの未来につながる」とばを求めて

コーディネーター 高木展郎 氏(横浜国大教授)
パネリスト 神谷信行 氏(弁護士)

田代正樹 氏(たしろ薬品社長)
山西雅子 氏(俳人)

今回のシンポジウムでは、教育界、文芸界、実業界、そして法曹
界の、それぞれ第一線で活躍の先生方をお招きし、前半はことば
の果たす役割を中心に、後半は国語の授業のあり方を中心に、それ
ぞれのお立場からお話しいただきました。

(高木) ……「一人ひとりの未来につながる」とばを求めて「とい
うテーマですが、私はこの「未来」という言葉がとても好きです。
……教育というのは未来を作ることなのだ。とすると、教育とい
うのは自分がかつて習ってきたことや、それまで受けてきた教育
をもとに教育を語る場が、現在は非常に多く出ています。考えてみ
ると高等学校教育もそうですが、子どもたちのこれからの未来、将
来を、私たちは高等学校三年間の中でどうやって作っていくのか。
しかも、生きていく中では、言葉とどうものが非常に大きくかわっ
てくる。そうしたことを実はきょう、ここで、たいへん短い時間
ですが、考えられることができればいいと思います。
(神谷) ……私が一番力を入れていることの1つは少年事件です。
……今日の子どもたちは高校生も含めて、そのリレーションがな
かなかかりにくくなっているという実感があります。言葉を使
うことのコミュニケーションが、非常に表層的なレベルでのやり

神奈川大会 分科会の概要

りが進んでいって、リレーションがかかるまでにすぐ時間がかかる。……たった一つの言葉で少年が立ち直るときもあるし、たった一つの言葉でリレーションが切れてしまうこともあるので、言葉は非常に危ないものを持っていると思えますが、大事なものは発せられること、言葉の奥にある、感情体験を共有することだと思えます。

(田代)……私もが実践しているのはお客様との「コミュニケーション」を密に取りながら、そのお客様方のソリューション、いわゆる肌のトラブルに合った化粧品をきっちりとお勧めする。これがわれわれの会社では非常に大切なことになってきています。そういうことが「……お客様との相手が何を語ろうとしているのか、何を求めているのか」ということをやはり理解していくことが大切なのだろうと思っています。言葉は、「言葉」と言う一言ですが、聞くことも、話すことも、書くことも、読むことも、いろいろな動作があるわけです。特に聞くこともう少し注力していかなければいけないと、最近つくづく感じています。

(山西)……俳句の指導に行った、ある老人ホームのお話をしたいと思えます。……皆さん、自分の胸をのぞき込んで、思いに一生涯命近付こうとされるのです。何か思っている、何か言いたい。そこに言いたい対象物がある場合もありますし、何かもやもやしているけれども、私は今、何かをしゃべりたがわなくていいこともあります。その思いというのは、案外すべ言えぬものではないのです。……結局、人間は最終的には思いというものを全部述べることはできないというのを、なぜか私は俳句をしてる間に感じたのです。ただ、思いがそこにある、そこをたどる着くことのできる言語なのだ、そんなことを思っています。

先生方の最初のご発言を抄出してご紹介しました。お話し合いからは、次の時代を担う子どもたちに生きる力としてのことをば身に付けさせたいという熱い思いが伝わってきました。詳しくは大会集録をご覧ください。

◎第1分科会 県立横浜翠嵐高等学校
研究授業 1年国語総合 夏目漱石『夢十夜』より「第一夜」
授業者 古川美知代(横浜翠嵐)

研究協議会 助言講師 萩谷英明(県教育委員会指導主事)

◎第2分科会 県立柏陽高等学校
研究授業 3年古典講読『古今和歌集』
授業者 池山弘司(柏陽)

研究協議会 助言講師 萬俣好明(横須賀大津高等学校長)

◎第3分科会 県立光陵高等学校
研究授業 1年国語総合 宮沢賢治『なめとこ山の熊』
授業者 岸川浩幸(光陵)

研究協議会 助言講師 鈴木俊裕(光陵高等学校長)

◎第4分科会 県立横浜緑園総合高等学校
研究授業 1年国語総合 小池昌代『カフエの開店準備』
授業者 松川妙子(横浜緑園総合)

研究協議会 助言講師 田中時義(横浜緑園総合高等学校長)

◎第5分科会 県立横浜栄高等学校
研究授業 1年国語総合 『伊勢物語』より「芥川」
授業者 富樫由里子(横浜栄)

研究協議会 助言講師 加藤俊志(横浜栄高等学校教頭)

◎第6分科会 市立横浜商業高等学校
研究授業 1年国語総合 谷川俊太郎『二十億光年の孤独』
石垣のん 『シンガ』
遠藤広樹(横浜商業)

研究協議会 助言講師 永瀬 哲(市教育委員会指導主事)

◎第7分科会 市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
研究授業 1年国語総合 「短歌と俳句」
授業者 山本俊太郎(サイエンス)

研究協議会 助言講師 栗原峰夫(サイエンス高副校長)

◎第8分科会 横浜雙葉中学高等学校
研究授業 中学3年国語講読 魯迅『故郷』
授業者 田中栄一郎(横浜雙葉)

研究協議会 助言講師 宮代哲彦(県立旭高等学校長)

◎第9分科会 横浜富士見丘学園中等教育学校
研究授業 中学3年国語 『徒然草』より「丹波に出雲といふ所あり」
授業者 秋本祐女(横浜富士見丘)

研究協議会 助言講師 岩壁清吉(横浜桐蔭大学客員教授)

◎第10分科会 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校
研究授業 中学2年国語 「ボスターを利用して話す」
授業者 高橋 励(附属横浜中)

研究協議会 助言講師 永吉寛行(県立教育センター指導主事)

◎第11分科会 県立鎌倉高等学校
授業者 発表者 1「芥川龍之介『羅生門』から始めるディベート」
村田克也(県立横須賀高等学校)

発表者 2「文学の授業の可能性―芥川龍之介『枯野抄』の実験―」
齊藤栄里子(聖ヨゼフ学園高等学校)

発表者 3「大学入試問題(評論文)の解説に挑戦―」
齋藤克也(県立鶴見高等学校)

発表者 4「『いのちのことは』で綴る二行詩」
後藤桂子(兵庫・日ノ本学園高等学校)

神奈川大会 分科会報告

第一分科会 神奈川県立横浜翠嵐高校

一、研究授業

授業者：古川美知代先生

科目・単元教材：一年国語総合 夏目漱石「夢十夜」より第一夜
授業の進行方法と概要：全11班に分かれてのグループ学習の発表
本時は前半5班の発表。聞き手はメモを取ることを指示。各班の発表直後に内容に関する質疑応答と授業者による解釈と補足をし、最後に授業者による板書により本時のまとめと整理を行った。

二、研究協議

1. 校長先生より

日本の子供たちは、近年読解力が低迷している。国語科がリーダーシップをとり、全科で取り組む必要がある。知識活用型、探求型の授業が望まれる。

2. 質疑・協議

- ・生徒が自分の考えに自信を持って、聞き手を見ながら話すことが出来ていた。読解の際の考察の裏付けが十分になされている。
- ・発表の型を整える重要性を確認、直後の評価も効果的であった。
- ・映像化はよいが、「ことば」の作品としてどのようにとらえていくべきか。言語への孤独な詰め寄り方も重要ではないか。

3. 授業者より

生徒ひとりひとりが書いた文章に必ず指導者がコメントをつけ、なるべく全体で共有する工夫をしている。作者自身の作品分析や研究論文を提示することもある。また、映像はあくまできっかけに過ぎず、正確な読解があつてこそ映像化も可能となる。常に原文にかえることの重要性を示したい。

4. 指導・助言 神奈川県教育委員会 萩谷英明先生

国語教育で大事なものは「バランス」である。一つは「わかる」

ことと「わからない」ことをはっきりさせる、すなわち「読みを確定させねばならない部分(理論的側面)」と「自由に読める部分(情緒的側面)」をはっきりさせるバランス。もう一つは、発表形式の授業で随りがちな生徒の「活動」のみに偏る危険性に留意すること、すなわち生徒の「活動」と「指導」の絶妙なバランスである。

第二分科会 神奈川県立柏陽高等学校

研究授業

授業者 池山弘司先生(柏陽高等学校)

三年古典講読「古今和歌集」

県下有数の進学校ということで、生徒の授業への取り組み意識も高く、充実した授業であった。内容は、古今和歌集の恋の歌の中から3首を選び、文法事項・現代語訳・恋の歌の部立てのどこに入れるか、をグループ学習するというものであった。特に最後の部立てを考える項目はクイズ的な要素もあり生徒の興味を引くものであると同時に、古文の総合力を問うもので授業者の工夫が見られた。

生徒はグループ学習にも慣れていくようで、辞書を使って調べ、互いに議論もして学習を進めていた。意見交換を通じて、生徒同士が理解を深めあっているのが分かったという感想も後の協議会で出た。グループごとの発表では、文法事項、現代語訳はほとんどのグループも正解していた。また見ぬ恋なのか、恋の終わりなのか、といった部立ての問いはグループごとに見解も分かれ必ずしも正解しないところが逆に教室を盛り上げていた。

研究協議では、設定された時間中途切れなく感想・質問が出て、盛んに協議が行われた。感想はおおむね好意的で、グループ学習がうまく機能していた、65分の授業時間が有効であった、部立てを考えさせるのがおもしろかった、きわめてユニークな解釈があつたが、必ずしも間違いない、むしろ興味深い、など様々であった。

(堀江 徹)

第五分科会 神奈川県立横浜栄高等学校

研究授業 一年国語総合『伊勢物語』より「芥川」

授業者 富樫由里子(横浜栄高等学校)

平成二十一年に開校したばかりの単位制普通科高校で、生徒の学習にたいする高い意欲を感じた。授業の最初の部分で、グループごとに起立しての話し読みは新鮮であった。その後、様々な視点での読解を各グループで挑戦し模造紙にまとめた。その結果を発表する生徒と、他のグループの発表を聞く生徒に分かれて、各グループ同時に発表会を行った。発表では聞く側の生徒はメモを取りながら聞き、質問をしていた。発表者はその質問に答えて聞く側の生徒と意見を交流し合っていた。さらさらそれをそれぞれのグループに持ち帰って報告し合い、読解内容を高めていた。授業の最後には、授業中に生徒が発見した疑問に授業者が答えてまとめた。授業者はストップウォッチで時間を細かく区切り課題を与え、生徒もそれに応えて活発に授業に参加していた。生徒は自ら考え、また他の生徒の考えを聞くことで、自らの読解を見直していた。授業者が一方的に説明する授業と異なり、生徒の主体性が重視された授業であり、古典を楽しく読む工夫がされた授業であった。(大川 敦士)

第七分科会 市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

研究授業 一年国語総合「短歌と俳句」

授業者 山本俊太郎(横浜サイエンスフロンティア高等学校)

助言者 栗原峰夫(横浜サイエンスフロンティア高校副校長)

平成二十一年に開校した単位制理数科高校で、サイエンスを学び、世界で幅広く活躍する人間の育成を目指している。二十室に及ぶ実験室・電子顕微鏡・ホールなど、充実した施設・設備を持っている。グループごとに作品を選び、作品について調べ、その魅力を伝えるための発表をする、という流れである。本時はグループ発表に充てられた。各グループとも工夫をこらし、演技力も豊かで盛り上がった授業であった。(吉川 徹)

第八分科会 横浜雙葉中学高等学校

一、研究授業 中学三年国語講読 魯迅 竹内好訳『故郷』

授業者 田中栄一郎先生(横浜雙葉中学高等学校)

助言者 宮代哲彦先生(神奈川県立旭高等学校長)

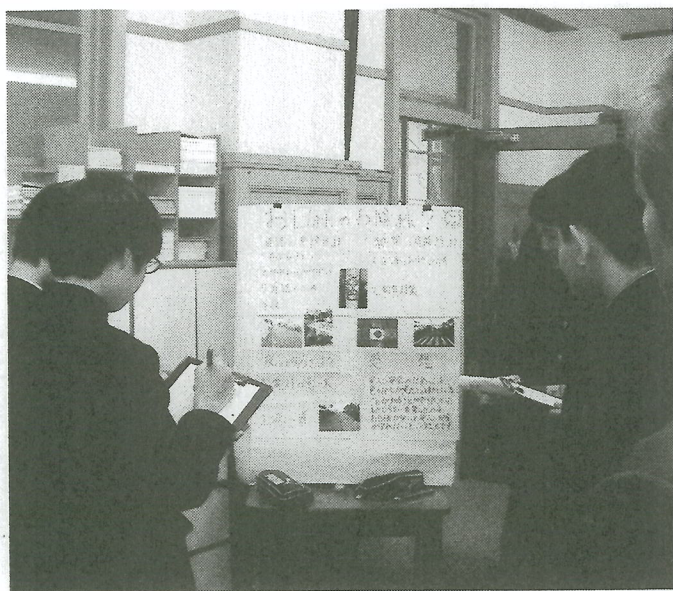
中学三年生に対して、説明文読解でよく使われる二項対立(対比)の構造理解を通して、小説の展開、場面・登場人物の設定を捉えさせ、内容を理解させることを主眼とした授業実践であった。研究協議では二項対立でどこまで読みを深めるのか、またその限界も含め、授業実践について活発な質疑応答が行われた。

二、小論文による発表活動

発表者 齋津真理子先生(横浜雙葉中学高等学校)

助言者 鈴木幸憲先生(横浜雙葉中学高等学校教頭)

高校二年生文系選択クラスでの授業であった。プレゼンテーションを通して、論文の内容をわかりやすく伝えアピールする力、他人



の意見を受け止めて自分の説を高める力、適切に批評し討論へ貢献する力の育成を主眼にした授業実践であった。生徒が発表する小論文は優れた内容であり、十分に説得力もあった。それ以上に参考になったのが、聞く側の生徒への指導であった。「聞く」技術や、双方向のコミュニケーションに意識が向くように生徒を導いていた。

授業で使ったプリント類も配付され、参加者が実践するときに参加にできる配慮はありがたかった。研究協議では、討論へと深める方法、評価方法への質疑応答や、助言者鈴木教頭先生から横浜雙葉で取り組んでいる、書く・話す力の育成の工夫についての説明があり、実践に向けて役立つ内容であった。(松永 忠久)

第十分科会 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

本分科会では、一つの研究授業と研究協議が行われた。

研究授業 二年国語「ポスターを利用して話す」

授業者 高橋励先生

助言者 永吉寛行先生(県立総合教育センター指導主事)

授業の流れとしては、小グループに分かれてのポスターセッションの後に学習を振り返るというものであった。「私の街の安心・安全」というテーマで各自が作成してきたポスターは目を引くものばかりでありそれだけでも感動を覚えたが、発表者それぞれが聴き手の反応や発表時間を意識して発表している様子から、ポスターはあくまでも補助であり発信の内容や方法を学ぶことが目的であると感じさせられた。また、聞く側はその発表内容から自らの考えを持ち、授業の最後にペアとなってその日に学んだことの情報交換をおこなった。生徒達は活発に話し合っており、聞くということをただ受身の行為ではなく主体的な行動にすることができていた。

研究協議においてはポスター作成についての指導や授業に用いた教具や評価のことなどについての活発な質疑応答がなされた。生徒に付けさせたい力に合わせて目標を定め、目標に合わせて授業計画を作成することが確実におこなわれていることを感じた。タ

イマー・紙バサミ等の教具についても明確なねらいを持って使用していることだった。最後に助言者の永吉先生より中学の授業を見ることが意義を語っていただいた。「言語活動の充実」について考える良い機会となった。(鈴木 直美)

第十一分科会 神奈川県立鎌倉高等学校

授業実践発表

一、芥川龍之介「羅生門」から始めるディベート実践

発表者 村田克也先生(県立横須賀高等学校)

読解プリント・心理テスト・その集計結果を周到に準備し、「下人の引剥ぎは『生きるために仕方がない』行為である」という論題でディベートをさせ、「総合的な学習の時間」に発展させた報告。

二、文学の授業の可能性―芥川龍之介「枯野抄」の実践―

発表者 齋藤栄里子先生(聖ヨゼフ学園高等学校)

構造・分析・内省読みの体系的読み、単眼・複眼・巨視・哲学的思考へと発展させる個と集団のスパイラル学習法、付箋を用いた教具「テーマボックス」による主体的な読み手を育成する実践報告。

三、大学入試論文(評論文)の解説に挑戦!

発表者 齋藤克也先生(県立鶴見高等学校)

精緻な年間計画の下、まごめとして班毎に評論文を読ませ、課題に沿ったレジュメ・効果的なプレゼンテーションを行わせた実践。

四、「いのちのこぼれ」で綴る一行詩

発表者 後藤桂子先生(兵庫県姫路市日ノ本学園高等学校)

「一行詩を書くときだけ素直になれた」という生徒たちの表現が、自分自身や周囲を変え、新たに他者とのコミュニケーションを深め、大きな一つの運動になっていくことの発表。

四本の実践発表後、助言者の県立有馬高等学校副校長、小田嶋均先生・総合教育センター指導主事、森孝夫先生から、いずれも、自分の学びや学び合いに実感を持つて出合いになっており、「生きる力」を育む実践の報告であるという講評がなされた。(高山 実佐)

平成二十一年度 夏季 全国連中国研修旅行の記録
蜀と呉の抗争の遺跡と張家界・鳳凰

全国連 参与 吉川 徹

全国連の研修旅行は二年ぶり(オリンピックのため)となった。重慶から長江を下り、宜昌・荊州を経て、常德・武陵源・張家界・鳳凰をめぐるコースである。川下りは八年ぶり、湖南省西部へは十二年ぶりとなる。

十一日の間に会った日本の旅行者は日中友好協会の一グループ



巫峡 (8月2日)

のみであった(張家界)。目立つのは韓国からの観光客である。中国名物ともいえる「物売り」が以前ほどしつこくない。レンガが崩れている民家を見ることはほとんどなかった。湖南省の王村は芙蓉鎮と名を変え(映画「芙蓉鎮」のロケ地である)、こったがえしていた。変わらないものもある筈のだが、通り過ぎる旅行者の目には入らないのだろう。

7月31日(金) 成田→広州→重慶

新しい広州白雲空港に降りる。空港ビルは北京首都・上海浦東よりも活気があつて広い。各所で南国の果物を売っている。

18時過ぎ、重慶着。超市(スーパーマーケット)で水とアルコールを仕入れ、港に向かう。以前とは違い、川岸から棧橋まで斜行ゴンドラが乗り付けるシステムとなっていた。乗り込むのは「揚子江楽園号」、全長86m、客室四層の大型船である。

22時、出港。夜景を楽しむ。大きなコンテナ埠頭が印象的。
8月1日(土) クルーズ 鬼の城

長江は大きく広がっている。島もできている。右岸を鉄道が併行する。重慶から貴州省に入り湖南省懐化に抜ける鉄道である。

13時、豊都着。町全体が上部に移っている。上陸するには三百段ほどの階段を上る。上ったところに土産物屋があつて、そこを抜けてカート乗り場へと進む。「鬼の城」そのものは変わっていない。

8月2日(日) クルーズ 白帝城・瞿塘峡・巫峡・神農溪

明け方、船は停泊していた。奉節の港に着いていたのである。

7時30分、「白帝城」。バスが長江の左岸に沿って進み、城の対岸まで運んでくれる。城へは、数百段の歩行者専用の橋を渡る。目がくらむ高さである。日本の橋に慣れた目には橋桁がいかに頼りない。要するに、白帝城は「島」になったのである。

10時30分、出港。すぐに「瞿塘峡」である。生憎の雨で、まともな写真は望むべくもない。「巫峡」にさしかかって雨は止み、光の具合もよくなった。「神女峰」が印象的。川幅が広がり巴東の町



荊州城 (8月3日)

が見えてきた。ここから神農溪のクルーズである。

前回は、艇で上陸し、そこで小舟に乗り換えて、一時間ほどさかのぼり、途中からはロープでひっぱったり、岩に鉄爪を引っかけたり・・・しかも、土家(トウチヤ)族の男たちはその後で、16km上流の村にまで舟を引いて帰って行くという話であった。

今回は、立派な二層の遊覧船がかなり奥までさかのぼり、途中には開けた箇所もあり、土家族の小綺麗な家が点在していた(以前はそこまでさかのぼらなかったのである)。

8月3日(月) 三峽ダム→宜昌→荊州

早朝、船は秭帰(シキ)の港に泊まっている。ダムの閘門が故障で、すべての船がストップしたのである。やむなくここで上陸することとなった。閘門通過を楽しみにしていたドイツ人のグループが

怒っている。

10時、三峽ダム。ダムの手前の駐車場で専用バスに乗り換える。

セキユリティエックがものものしい。比較物がないためダムは大きな堰に見えた。堰体の向こうに霞む西陵峽の山々が美しい。

13時、猗亭区古戦場。宜昌市郊外にある長江に沿う古戦場。関羽の仇を討とうとした蜀軍がここで大敗した。

15時30分、楚紀南古城跡。「鄂」の跡である。碑の他には何もない草地で伍子胥を偲ぶ。

16時、荊州城。城内の「玄妙観」「関帝廟」を見学する。

8月4日(火) 荊州→常德
9時、荊州博物館。城内にある博物館。ミイラに感動。

12時、荊州発。長江大橋を渡り湖南省に向かう。
15時、常德着。何と、この時間で動けなくなりました。雨で道が崩れ、予約していた車が来れなくなりましたのである。

8月5日(水) 常德→武陵源

9時30分、桃花源。唯一公認の桃花源というふれこみである。たしかにのどかな風景であるが、それなりの川をさかのぼり、トンネルを抜けて開けたところであってほしかった。

13時、武陵源。石柱が立ち並んでいる景観で知られる。石英で出来ているそう。場所によっては三百以上の石柱も存在する。一部には石灰で出来たカルスト地形もある。

14時、黄石寨・金鞭溪。武陵源にある景勝地である。十二年前に四千段の石段を二時間かけて登ったという黄石寨だが、今回はロープウェイが一気に我々を山上に運び上げてくれた。

8月6日(木) 武陵源(天子山・袁家界)

終日、山の上で過ごす。どんなに馳走も飽きるものだ。「息をのむ」景観が続くのだが、しまいには「これも同じだ」という気になつてしまう。山上にある「土家族資料館」が印象的。崖に張り付いた三百坪ものエレベーターで一気に下る。すさまじい開発である。夕食後、超市をうろつき。水牛の「孫の手」を購入する。

8月7日(金) 武陵源→張家界

9時、宝峰湖。人造湖である。ここも開発が進み、入り口の広場では土家族のダンスサーが踊っている。20分ほど山を登る。

11時、黄龍洞。世界最大の鍾乳洞だという。地底湖を船で進む。13時30分、天門山。山上に大きな洞が開いており、そこを飛行機が通り抜けたことで知られる。市の中心部からゴンドラリフトに乗る。民家を越え、張家界駅を越え、山を越え、野を越え、最後を雲中を進む。洞には専用バスで行く(実に恐ろしい道であった)。バスを降りると洞に至る石段(九百九十九段・直線・急傾斜)が

眼前に迫っている。今回、もつとも疲れた箇所である。

8月8日(土) 張家界→鳳凰

ここから先、高速道路はない。延々と山道が続き、トイレはすべて有料というので小銭を用意する。

10時、芙蓉鎮(王村)。すっかり観光地化しており、ごつた返している。映画の主人公が作っていた「米豆腐」というのは「コシのないスイートン」を想像すればよい。「文革」の遺産で客を呼べるようになったのである。

15時、南方長城。鳳凰の町で昼食を取り、そのまま長城に向かう。敵対する苗(ミャオ)族対策として作られたものだという。苗族衣装を纏った記念撮影がはやっていった。

17時、鳳凰。「鳳凰古城」を一巡りする。

8月9日(日) 鳳凰→広州

自由時間となり、鳳凰古城をうろつく。モロモロのものがあつた。ブタの顔の皮・キジ・スッポン……。あちらこちらで生姜塘を手作業で作っている。乾燥キユーイ(キユーイは「獼猴桃」と書く。「お猿の桃」ということである)の店も目立つ。実質的に旅は終わりである。

11時30分、出発。空港のある芷江まで、道は遠い。

18時55分、芷江離陸。19時35分、長沙着陸。

20時40分、長沙離陸。21時45分、広州着陸。

白雲空港は市街地の北方30kmのところにある。見事な高速道路(片側4車線)が通じている。深夜、タンメンを食す。

8月10日(月) 広州→成田

早朝、沙面(旧租界)地区を散歩する。瀟洒な洋館、いい雰囲気のお茶店。広州は早くから門戸を開いていたため、全体におっとりしている。朝食は老舗レストランでの飲茶。公園を望む一室でゆくまで堪能する。

南国の日射しはさすがにきつい。町はアジア大会を迎える準備で建築ラッシュである。陳氏書院・鎮海楼をめぐり空港へ向かう。



武陵源 (8月6日)

平成二十二年 全国連研究大会 北海道大会のご案内

生き抜くためのことばを求めて ―個から地域へ、世界へつながる国語教育―

北海道高等学校教育研究会国語部会長
第四十三回研究大会実行委員長

喜多清彦

的な就職難のあおりも受け、高校生の就職内定状況は三〇・八％、全国の五・二％に遠く及ばず、都道府県別に見ると全国ワースト2という状況に陥っております。(平成二十一

文化会館を会場に開催いたします。この日は、総会、文部科学省講話、記念講演、分科会を行います。文部科学省講演では、新学習指導要領及び解説に関する詳細なお話を伺うことができるものと思っております。また、午後の記念講演では、帯広市出身で、第九十八回芥川賞を始め数々の文学賞を受賞されている、詩人、翻訳家、小説家である池澤夏樹氏をお招きする予定です。世界に対する科学的な理解と文学的な理解を融合したみずみずしい感性に賞かれた作品世界が特徴と評される氏の、多岐にわたる表現活動は、まさに教育活動全般にわたり、言語活動の充実が求められている今、私たちも氏の講演を大変楽しみにしております。

「生きてはたらくことばの力」をテーマに開催され、成功裏に終了した神奈川大会での、見事な大会運営、分科会における研究授業や研究協議の質の高さ、そして手作りの香り漂う文学研修など、視察に訪れた北海道大会実行委員のメンバーの感動は、未だに覚めや

年十二月十五日文部科学省発表、十月現在の統計)

りません。これまで長きにわたり多くの都府県において積み重ねてきた全国連研究大会の歴史や伝統の重さを痛感するとともに、各地

このような困難な社会環境の中にあつて、生徒に身につけさせた

ならでの持ち味を生かし、何年たっても各大会での情景が思い起こされるような、印象深い大会を開催されてきた各都府県関係者の

い力は、とりもなおさず時代を生き抜いていくための力であり、そのために求められるのが、基礎的・基本的な知識及び技能はもとより、思考力、判断力、表現力などを育むことが急務であると考えて

皆様のご努力に、改めて頭の下がる思いをしております。

の教科・科目の基礎・基本である国語教育であることは言を俟ちません。

次年度は、北海道でもこのようなレベルの高い大会を是非成功させなければと思うと、身震いを伴いながら決意を新たにしているところ

北海道は、ご承知のとおり、複数の都府県を合わせた面積に相当する広さがあり、行政区域である十四の支庁が点在しています。北海道においてはそれぞれの土地で地域に密着した教育が行われており、国語教育においても地域の特色を生かしながら、全道、全国、そして世界を視野に入れ、生徒一人一人の個性を伸ばし、豊かな表現力を身につけさせるような特色ある実践が展開されております。

北海道で行われることとなりました。八月二十五、二十六日の両日、札幌市で全体会、分科会、公開授業等は隣接する小樽市、千歳市を、さらに現地視察では旭川市も加えて執り行う予定しております。

このような中、北海道大会においては「生き抜くためのことばを求めて」を大会テーマとし、北国北海道の自然・文化・歴史・風土等の特性に根ざした国語教育の実践などをお集まりの皆様にご紹介し、ご指導やご助言をいただきながら、全国の国語教育の振興と充実に資するような大会に作り上げたいと願っております。

前回、北海道で大会が開かれた平成二年には、二十年後の北海道経済がこれほど苦しい状況に追い込まれていることは予想だにしないことでした。現在、北海道は極度の財政難に直面しており、全国

北海道大会では次のような日程を予定しております。

第一日(八月二十五日)は、札幌大通公園に隣接する札幌市教育

第二日(二十六日)は、札幌市、小樽市、千歳市のあわせて九つの高等学校において公開授業、研究発表などを行う予定です。研究発表では、全道各地のベテランから新進気鋭の国語科教員が教育実践を携えての発表となり、北海道に住む私たちにとても貴重な機会と位置づけています。

午後

午後の現地視察では、広大な北海道故に、半日でのコース設定に難航しているところではありますが、現在、旭川での三浦綾子記念館コース、道立文学館コース、小樽文学散歩コースなどを計画しております。

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間ではありますが、北海道の夏に、全国から多数の皆様方のご参加をいただきますよう、重ねてお願いいたします。

なお、大会への参加申し込みにつきましては、四月の最終案内にあわせ、北海道大会のWebページ上で行うことができるようになります。詳しくは最終案内でお知らせいたします。

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

で皆様をお迎えできるものと思っております。二日間という短い期間

八月という季節柄、おいしい食べ物と本州に比して心地よい暑さ

【会務報告】

全国高等学校国語教育研究連合会 事務局長
神能 精一（東京都立板橋有徳高等学校）

本年度の大会は、十一月五・六の両日、横浜市を中心に神奈川県で行われました。神奈川県での大会は平成四年以来十七年ぶりとなり、かつての若手の先生たちが今大会では運営の中心になっておられ、頼もしく感じました。準備期間を通じ、運営にかかわった方々ばかりではなく、神奈川県高等学校教科研究会国語部会の皆様が総力を上げ、魅力ある大会にしていこうという意気込みを強く感じました。その結果、充実した大会が実施できました。実行委員会をはじめとした各方面の方々に深く感謝を申し上げます。

第四十二回研究大会神奈川大会

期日 平成二十一年十一月五日（木）・六日（金）

テーマ 「生きてはたらくことばの力」

第一日 神奈川県民ホール

第二日 県立横浜翠嵐高校・県立柏陽高校・県立光陵高校・県立横浜緑園総合高校・県立横浜栄高校・市立横浜商業高校・市立横浜サイエンスフロンティア高校・横浜雙葉中学高等学校・横浜富士見丘学園中等教育学校・横浜国大附属横浜中学校・県立鎌倉高校

全国連事務局では「一人の成果を全ての教師のもとに」をスローガンに、三十名のスタッフが三部一委員会プロジェクトチームで活動を行っております。以下、主な活動について報告いたします。

総務部

各研究団体・文部科学省・協賛団体との連絡調整。

高文連・讀賣新聞社主催「全国高校生文芸コンクール」の審査。全国研究大会の支援。

中国研修旅行の企画運営。

研究部

二十一年夏季「蜀と呉の抗争の遺跡と張家界・鳳凰」研究部 「研究授業・研究発表一覧」の編集発行。

昨年度合冊本を発刊しました。本年度からは、各年度の成果をまとめ、全国大会で配布してまいります。

高校国語教科書本文のデータベース化。

ホームページの運営 <http://www.kokugo.gr.jp>

リニューアルしました。是非一度、覗いてください。

広報部 「全国連会報」の編集・発行。

入試問題検討委員会 センター試験の検討と評価・提言。

国語実践の会 年間授業計画の研究と授業実践。

その他 全国代表者会議の実施。協賛団体との連携。「高校生創作コンテスト」「漢詩コンクール」「高校生『わたしのエッセイ』コンテスト2008」等の後援。

今回の大会では、第一日目、総会に続き、「新学習指導要領の理解を深めるー『言語活動の充実』と『古典の指導の改善』ー」というテーマで文部科学省の西辻正副氏による講話がありました。午後からは直木賞を受賞したばかりの北村薫氏が「読むこと 書くこと」と題して対談形式の記念講演、そして「一人ひとりの未来につながることを求めて」をテーマにシンポジウムがもたれました。二日目の研究授業、研究発表も、十一分科会と盛りだくさんでそれぞれ熱がこもったものでありました。参加された先生方が明日に生じる研修成果を各学校に持ち帰ることができた大変素晴らしい大会になったと確信いたします。新しい学習指導要領が発表され、未来を見据え、今後の国語教育の方向性を探る時、常に「ことば」に立ち戻ることが求められます。各校で本格的に新教育課程を検討し始めた今、皆様方の力で「ことば」を中核に据えた教育活動を展開できる教育課程が編成されることを望みます。

昨年、発刊した「高等学校国語教育研究発表（公開）授業一覧合冊本」につきまして、東京大会で配布するとともに全国の高校へ

発送しましたところ、個人用に欲しいので分けて貰いたいとの問い合わせが数多くございました。残部もなく、お断り申し上げます。印刷代と郵送料程度でお分けする体制をとりますので、湯島聖堂内の本部事務所まで郵送でお問い合わせください。

諸先輩方の大量退職を迎え、世代交代が急速に進む中、国語教育の「継承」をはかるものとして、また、研究・授業実践のデータベースとなりの国語教育研究の基礎資料として活用して欲しいと思います。また、これまで、全国より多くの資料の提供を受けております。また、改めて感謝申し上げますとともに、今後とも貴重な資料の提供をお願いいたします。

平成二十二年度の全国連第四十三回大会は八月二十五・二十六の両日、北海道で行われます。主会場は札幌市教育文化会館です。また、大会テーマは『生き抜くためのことばを求めて』に定まりました。本年にもまして盛況な大会となりますよう、あらためてご支援を賜りたくお願い申し上げます。

事務局運営も二年目になりました。まだまだ手際が悪く、ご迷惑をおかけしております。精一杯努めさせていただきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

全国連事務局

事務局本部事務所

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-15

湯島聖堂 斯文会館内

電話 〇五〇-三六四九-一八七二

※紀要等の郵送物は本部事務所のほうへお願いします。

事務局長

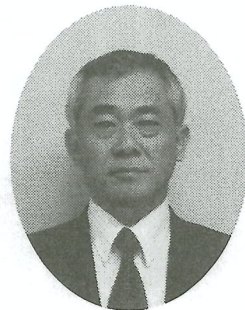
神能 精一（じんのう せいいち）

東京都立板橋有徳高校（〇三-三九三七-六九一一）

日本語検定

生きた日本語の力を確かめる

全国高等学校国語教育研究連合会会長
東京都立田柄高等学校校長
村越 和弘



今学校教育に求められているのは、あらゆる学習活動を通して、生きてはたらく日本語の力を高めていくことです。私たちは日本語を通して考え、判断し、表現し、コミュニケーションを図っています。そして、言葉は長い年月をかけて継承されてきた文化そのものであり、日常会話から知的活動まで、私たちの豊かな社会生活を築く基盤となっています。

6つの領域からなる「日本語検定」は、総合的に「生きた日本語」の力を確かめることができます。「日本語検定」を通して、「日本語の運用能力」を鍛えるとともに、「正しい日本語」「美しい日本語」とは何かを考えるきっかけにしてほしいと思います。きっと新しい発見があるでしょう。「日本語検定」は楽しいチャレンジになるに違いありません。

日本語検定では、敬語や文法(言葉のきまり)・語彙・表記・言葉の意味・漢字の6領域において、それぞれの知識と運用能力を測定します。
入試時の加点や合否判定の際の優遇条件にする学校が増えています。

3級(語彙)

問1 「」に記されている二つの言葉の関係と同じ関係になる組み合わせはどれでしょう。

【氏名―芳名】

- ① 弟 ― 愚弟
- ② 御社 ― 貴社
- ③ 顔 ― 尊顔
- ④ 父 ― 岳父

4級(漢字)

問2 □に入る適切な漢字を「」から選んでください。また、その言葉を適切に用いている文をA・イの記号で答えてください。

【新進気□】

- ア 新たに入部した部員たちも、県大会での優勝を目指して、新進気□の心構えで頑張っている。
- イ 彼は、昨年の新人賞受賞後も次々と作品を発表し、新進気□の作家として注目を集めている。

- 「①行 ②暇 ③業 ④動 ⑤変 ⑥異 ⑦島
- ⑧栄 ⑨号 ⑩鋭」

解答 問1 ③ 問2 イ⑩

特定非営利活動法人 **日本語検定委員会** 【協賛】時事通信社/東京書籍 【後援】日本商工会議所/日本経団連事業サービス/全国高等学校国語教育研究連合会

お問い合わせ 日本語検定委員会事務局 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
☎ 0120-55-2858 FAX.03-5390-7454 ●午前9:30~午後5:00(土・日・祝日を除く)